社会思想の生い立ちと将来像*（I）

大阪大学経済部　内　海　洋　一**

目　次

第1章　社会思想と社会主義思想
第2章　古代およびルネッサンス期の社会主義思想
第3章　啓蒙期社会主義思想
第4章　過激急進主義と無政府主義
第5章　マルクス主義の成立
第6章　唯物弁証法
第7章　唯物史観
第8章　マルクス主義経済学
第9章　マルクス主義経済学批判
第10章　マルクス主義のプロレタリア独裁論
第11章　ドイツにおけるマルクス主義の運命
第12章　イギリスのフェビアン社会主義
第13章　現代社会思想の系譜
第14章　最近における変化

第1章　社会思想と社会主義思想

1　社会思想の意義

まず最初に社会思想とは，どういうものであるかを考えてみよう．社会思想という言葉は現在いろいろに使われているが，定義すれば現在の社会秩序，あるいは社会組織を改革ないしは維持しようとする思想である．

したがって，社会を改革しようとする共産主義的な思想または社会主義の思想，または民主社会主義の思想といったような思想は，みな社会思想である．さらに，現状を維持しようという保守の思想，あるいは自由主義の思想　また現状を右の方向にかえていこうというナチズムやファシズムの思想もことごとく社会思想である．

ここでは，社会思想の中でも最も重要である社会主義思想を中心に取り上げる．

特に社会主義思想について述べることが重要であるのは，われわれの身辺にいろいろな社会思想があるが，自由主義の思想あるいは資本主義的な考え方は，現在の世の中にすでに実現している．したがって，われわれの身辺を見渡すとそれで大体見当がつく．また，ファシズムやナチズムは現在ではほとんど力をもっていない．一部の人がそういう右翼的な思想をかかげて時々暴動を起したり，あるいは殺人事件を起したりしているが，戦前のような力は到底もっていない．

現在われわれの身近にあって，非常に大きな勢力をもっているのは何といっても社会主義思想である．これはいろいろの社会思想の中で，わが国で未だ実現されておらず，しかも思想として非常に大きな力をもっている．こういう観点から社会思想のうち特に社会主義思想をとりあげる必要があると思われるのである．

2　社会主義の意味

(1)　社会主義

社会主義ということばは，前世紀の初期に生れた．しかも，このことばよりも社会主義者ということばの方が先に現われてきたのである．すなわち，その頃ロバート・オウエンという社会主義者が英国にいたが，そのロバート・オウエン派の人々が発刊していた「協同組合雑誌（コ・オペレーティブ・マガジン）に始めてソーシャリスト，すなわち社会主義者という言葉が用いられたのである（1827年）．同じ頃，フランスの社会主義者サン・シモンの一派が「地球」（ル・グローブ）という雑誌を出していた．この名前のおこりは，今の社会では人間が人間を搾取しているが，それよりも人間は地球を開発して地球を搾取すべだという考えにもとづいている．この雑誌にソーシャーリズム，すなわち社会主義ということばが始めて出てきたのである（1832年―137年前）．社会主義ということばができたのは割合新らしいことである．

ついでに，資本主義という言葉はいつごろできたかというと，これは社会主義という言葉よりも遅く現われた．ふつう，資本主義が先に現われ，そのいろんな欠陥が出てくるに従って社会主義思想が起こり，社会主義という言葉も現われてきたのであろうと想像されるのであるが，じつは，資本主義という言葉は，社会主義という言葉よ

---

*　これは，一般社会人に対する教養のための講演の速記に加筆整理したものである．

**　経済学部長，経済学博士

りもおそく現われてきたのである．1840年頃ルイ・ブランが資本主義という言葉を初めて使ったといわれている．しかしその後しばらくは資本主義という言葉はあまりはやらず，今世紀のはじめ頃ゾムバルトが，近代資本主義という本を書いてから広く用いられるようになった．

(2) 社会主義の意義

さて，この社会主義とは何を意味しているか．これは，なかなか難かしい問題である．フランスにル・フィガロという新聞があったが，これが前世紀の末に，社会主義とはどういうものかということについて多数の人に対してアンケートを求めて調査をしたところ，社会主義の定義がじつに600も集まった．それから先に述べたドイツのゾムバルトが社会主義の意味を分類したところ，約200種類の社会主義が区別できたのである．

それでは，われわれは社会主義をどのように理解すればよいのであろうか．

この社会主義という言葉は英語ではソーシャリズムである．このソーシャリズムという言葉を2000年程前のラテン語までさかのぼるとゾチウスという言葉に行きつく．このゾチウスという言葉は仲間ということを意味する．こういう意味から考えると，社会主義というのはお互いに対等の立場で，身分的な上下のへだたりがなく，仲間として協働でやって行こうということを指すことになるのである．これが社会主義の最も中心的な理念である．

その他の社会主義の定義については社会主義とは私有財産をなくする社会制度，社会主義とは利潤をみとめない経済体制あるいは社会主義とは自由経済市場をなくして計画経済でやって行く社会といったようなものがある．

こうして，いろいろな社会主義の規定の仕方があるわけではあるが，こういう社会主義の概念規定は，元来「対等な立場における協働」ということから出てきているのである．1人の人が多くの私有財産を持っており，他の人が全く持たないのは対等ではない，だから私有財産をやめよう．あるいは自由経済競争では金持ちと貧乏人ができるから対等ではない，だから自由経済を計画経済にしよう，というふうに考えるようになったのである．その根本はやはり，対等で平等な立場における協働という理念にあるのである．

(3) 社会主義と共産主義の区別

このように社会主義を定義した上で，歴史の発展過程においてどのような社会主義が現われ，それはどういうふうに長所と欠点をもっていたかということを検討して行こう．

しかしその前に社会主義と共産主義はどういうふうに区別されるのかという問題をとりあげてみよう．広い意味の社会主義は狭い意味の社会主義と，共産主義とに分れる．広い意味でいえば社会主義も共産主義もどちらも社会主義になるわけであるが，狭義の社会主義対共産主義というように分けた場合，どういうように区別されるのであろうか．この区別されるのであろうか．この区別の仕方には3つある．

（i）第1番目には，社会主義は生産手段のみを共有にする．共産主義の方は生産手段だけでなく消費財をも共有にする．社会主義というのは銀行，会社，森林，船，鉄道などの生産手段を国有にするが，個人の衣服や食物は勿論，住宅などは個人の所有に任せておく．勝手に自分の金で消費財を買うのは認める．これが社会主義である．

共産主義というの生産手段（財）は勿論，キャラメル，靴下，あるいは家，時計などの消費財も共有にするのである．

それから消費財共有の意味には2つある．

1つは，消費財が非常に豊富に生産されて国家の貯蔵所に置いてあり，とりたい放題にとって使っていくという状態である．消費財があり余るほど生産された場合における共有である．理想の共産主義社会における共有である．

もう1つは，消費財はそれ程多く生産されず窮屈ではあるが各個人が勝手に消費財を買って使うのではなく，実際に消費財を使うまでは国家，あるいは公共体が所有する．そして，使う段になってそれぞれ配給してやる．このような公的配給制という意味の共有もある．

このように消費財の共有ということには2つ考えられるが，いずれにしても生産手段（財）と消費財を共有にするのが共産主義で，生産手段だけ共有にして消費財は各人の自由に任しておくというのが社会主義である．

（ii）第2番目の区別の仕方では．社会主義は能力に応じて働き，能力に応じて受けとる，というのである．現在のソ連の制度は能力に応じて働き能力に応じて受取っているわけであって，ソ連では自国を決して共産主義であるとはいっていない．ソ連の正式の名はソビエト社会主義共和国である．少し以前には，フルシチョフがソ連もようやく共産主義に一歩踏み出してきたと述べている．このように能力に応じて働き，能力に応じて受取るのが社会主義である．これに対し，能力に応じて働き，必要に応じて受け取るのが共産主義である．身近かな例をあげると，我々の家庭の中がそうである．能力のある人が働いて家族の人にはみんな必要に応じて受取っている．たとえば，病人であれば働かなくてもその人が一番

よけいに金を使うというように，家庭の中では能力に応じて働き必要に応じて受け取るということになっている．こういう社会が共産主義である．

(iii) 第3番目の区別の仕方は，極めて通俗的であるが，英国労働党や北欧の社会民主党が考えているような非マルクス主義的なイギリス・北欧型の社会主義を狭義の社会主義といい，ソ連・中国型の社会主義，つまりマルクス型の社会主義を共産主義という区別の仕方である．

こういう具合に社会主義と共産主義の区別については3つぐらいの基準があって，それぞれ重要性があるが，ここでは主としてこの第3の区別を採用する．

第2章　古代およびルネサンス期の社会主義思想

1　古代社会主義

(1)　リュクルゴス

このような社会主義という思想は自由主義とともに，18世紀末のフランス革命の前後に盛んになったヒューマニズムの思潮から生れてきたものである．しかし，社会主義的な考えは昔からあった．先にも述べたように，社会主義という言葉は比較的新しくできたのであるけれども，この社会主義という言葉が示すような思想は相当古くからあったのである．

一番古くまでさかのぼるとギリシャに行きつく．古代ギリシャの都市国家の中でスパルタとアテネが有力であった．そのスパルタにリュクルゴスという偉い政治家がいた．リュクルゴスについてははっきりしたことはわかっていないけれどもプルタルクという人がギリシャ時代の英雄について著わした書物に書かれている．その中で，リュクルゴスはスパルタで社会主義的な政治を布いたと述べられている．リュクルゴスはまず第一に，スパルタで元老院制をしいた．王と民衆との間に元老院をつくり，王の専制を厳しく制限し又民衆のわがままも抑えた．つまり元老院が王と民衆との間の力のバランスをとって，ともかく従来よりも民主的な政治形態を布いたわけである．第二に土地改革を行った．当時徐々に貨幣経済がはいって貧富の差が大きくなり，広い土地を持つ富者と土地のない貧乏人の差別がはげしくなった．そこで，全ての土地を没収し，それをあらたに平等に市民に分配した．だから秋の収穫期になると各家の門の前に同じ程度の穀物の山が積まれるようになったのである．第三に，土地改革だけでは不十分だというので動産にも手をつけた．それには何よりもまづ貨幣の改革を行わなければならない．金や銀で作った貨幣があるから金持ちと貧乏人の差が出てくる．あるいは外国からきた悪い商人がスパルタから金をもって帰る．そこでこうした貨幣の害悪をなくするために奇抜な考えを実行したのである．すなわち，金，銀の貨幣を廃止して鉄の大きな貨幣を作った．なぜ大きな貨幣をこしらえたかというと，金，銀は小さくても非常に値打ちがあるから，だれでもいくらでも貯蔵することができる．鉄の大きな貨幣にすると家の中に蓄め込むことができない．また大きな鉄の貨幣なら盗んで帰ることも困難である．さらに，金銀ならそっとワイロとして渡すこともできるが大きな鉄の貨幣はそれができない．またこの鉄の貨幣は，熱して酢につけ，くわやすきを作ったりなど，ほかのことに使えぬようにしたということである．ウソかまことかわからないが，こういうことが記録に残っていることは確かである．第四に共同会食制度を設けた．スパルタのような小さい都市国家のことであるから共同会食制も可能であった．いくつかの共同会食場を作って，みな平等にチーズ，黒パン，いちじくなど同じものを食べた．一部の者がうまいものを食べ，他の者がまずいものを食べるのはよくないということからこういう共同会食制を設けたのである．それから結婚と教育に非常に力を注いだ．というのは，社会をよくするために，どんなに組織を改めてもその組織の中に住む人間がよくなければ駄目だからである．ところで，良い人間をつくるためには，まず，父親や母親の体格をよくしなければならない．それにはスポーツをやる必要がある．こういうわけでリュクルゴスはスポーツを奨励した．そのスポーツはすっ裸でやるのである．周知のごとくギリシャ時代には美しい裸の像の彫刻がある．裸で円盤投げや槍投げをしている．あのようにスポーツをやるわけである．そうするとつまらない虚栄もなくなる．人間は，ネクタイをしめたり，髪に油をつけたり，口紅を塗ったり，きれいな着物やアクセサリーでとりつくろったりしているがこれは行きずると不健康になる．お互いに裸でスポーツをすれば人よりもきれいな服を着ようということよりも人より立派な体格を作りあげよう，バランスのとれた肉体をこしらえよう，ということに注意が向く．男は筋骨たくましい勇士になってやろうと考え，女ならバスト，ウエスト，ヒップなどのバランスがとれた体格をつくろうと心がける．その結果，女の体格もぐんとよくなる．そして丈夫な子供が生れる．さて子供が生れると酒で産湯を使わせる．酔っ払って死んでしまうものは捨ててしまう．酒で産ぶ湯を使ってもなお元気に動くような子供を育てて行くのである．そうすると，すばらしい健康な子供ができてくる．その子供たちは全部国家の手によって教育される．こうして立派な人間をつくろうということをリュクルゴスは考えた．大雑把に述

べたが，これがリュクルゴスの社会主義である．このリュクルゴスの社会主義はずっと後まで影響を及ぼしてきている．

(2) プラトン

リュクルゴスについでプラトンの社会主義が現れた．哲学者プラトンは，政治をつかさどるのは哲学者でなければならないと考えた．一番知恵の豊富な哲人，これが政治をやるのである．こうした哲学者の統治のもとで，国民は三つの階級に分かれる．第一番目が為政者階級，第二番目が護国者階級―国を護る軍人警官階級―，第三番目が生産者階級，人にはこのようにそれぞれ生れつきの素質によって3つの階級に分かれる．

プラトンは哲学者であるからその社会主義思想も非常に哲学的なものである．人間の精神は，理性と気概と欲情の3つに分かれている．このそれぞれをみがきあげていくと知恵，勇気，節制という3つの徳目になる．この中でも知恵が一番指導的な役割を演じ，勇気と節制はそれに従う．そして為政者は知恵の徳目を実現する．護国者は勇気の徳目を実現する，生産者は節制という徳目を実現する．ということになっている．このうち生産者は物を生産するわけであるから私有財産を所有するし家族ももつ．しかし，為政者や護国者は完全に共産主義的に生活しなければならないという．つまり，プラトンは為政者や護国者について共産主義的あるいは社会主義的な政治を考えたのである．

その社会主義とは，為政者や護国者は私有財産を持ってはいけないのであり財産は全部国の共有にする．また皆が共同の家屋に住み，一人一人が自分の家を持つことは許されない．食事も集まって会食する，つまり共同会食制である．なぜこのようにするかといえば私有財産を持つと人間はみな自分の私有財産を増やすことばかり考えるからである．個人で一人一人別々にものを食べていては自分だけ美味ものを食べようとする．ほかの人がまずいものを見て自分のうまいものを譲ってやろうという人間は多くはいない．共有財産，共同家屋，共同会食のもとでは国全体のことを一生懸命に考える．だから私有財産をやめ共同会食をやって共同の富の増加のことを為政者や護国者が考えるようにするのである．

もう1つプラトンの考えたのに妻子共有制がある．妻や子供を一人の男が持つのではなく共同で妻と子供を持つのである．女の方からいえば，自分一人で夫を専有できないのである．だから夫を共有にするのである．だれでも村中の若い人はみんな互に夫であり妻であるというふうな社会にしてしまうのである．子供たちはだれの子だということなしに全部のものと決め全部いっしょに育てるのである．なぜかというと，大体，人間が私有財産を築く基本的な動機は妻や子のためという点にある．妻があるから，「私が先きに死んだときに自分の妻が困らないように」というわけで一生懸命財産を貯める，また，自分の子供に財産を残しておいてやらないとかわいそうだということで私有財産を作ろうとする．ところが共有になると，どれが本当の自分の子供かわからなくなるので結局全部の子供が自分のものだと考えるようになる．こうした状態のもとでは一人の妻のために財産を残そう特定のわが子のために財産を残そうということを考えずに全体の富を増そう，社会のすべての人を幸福にしようと考えるようになる．こういうわけで妻子共有制を考えたのである．それと共に優生政策についても考えていた．優秀な男子は優秀な女子となるべくしばしばちぎりを結んで優秀な子供を多く作り，劣等なる女子となるべくまれに関係して子供を少なくつくるようにする，と主張している．

これがプラトンの社会主義思想である．古典的古代の時代にも幼稚ながらこのような社会主義思想があったのである．

次に，いわゆる中世の暗黒時代―約1000年間―がやって来たのである．中世の暗黒時代には人間は現実の社会を住みよく改造するというよりも，神にたより死後天国に行けるように，ということを考えた．したがって中世の1000年間には，社会主義思想は一時鳴りをひそめたのである．

2 ルネッサンス期の社会主義思想

(1) トーマス・モア

中世が終ってルネッサンスの時期に入ると再び社会主義の思想が出てきた．ルネッサンス期に最初に現われた社会主義者は英国のトーマス・モア（1478～1535）である．当時のイギリスでは囲い込み運動が起ってきており，彼は農民や労働者が非常な苦しみに会っているのを見ていた．

囲い込み運動というのは，当時，イギリスでは羊毛の価格が騰貴してきたために大地主たちが片っぱしから農民を自分の領地から追いやってしまってそのあとに羊を飼いはじめ，柵で領地を囲んでしまったのである．そこで追い出された農民は町に流れてきて浮浪者や犯罪人になった．それでトーマス・モアは社会主義を考えるようになったのである．

トーマス・モアはその著「ユートピア」の中で社会主義の輪廓を描いている．「ユトピア」と理想郷という意味である．そのユートピアはどのように運営されているかというと．この国はまず州からできている．州の下に区があり，この区の下に家族がある．このいくつかの家族が区を形成し，区が集まって州をなし，区長や州長は選

挙によって選ばれる．このように，つぎつぎと選挙によって家長，区長，州長，元首をえらぶわけである．その意味では，先に述べたリュクルゴスの民主主義と比較にならないほど徹底した民主主義を考えていたわけである．

一番小さい単位は家族であるが，家族は40人のメンバーから成っている．そしておもしろいことにはこの40人のほかに2人だけ奴隷がついている．40人の人がどのように生活するかというと，この一つの州のまん中に都会があり周囲には農村がある．都会には政治を行うところ，学校，工場，倉庫などがあり，農村には田や林や川があるわけである．この40人の家族が20人ずつの2組に分かれ，そのうち1つの組が都会にきて工業に従事しているとき他の1つの組は田舎で農業に従事する．これが2年続くと，2つの組は交替して，農業に従事していた者は都会へ出て工業に従事し，工業に従事していた者は田舎に出て農業に従事するのである．

これはなかなかよい考えである．大体人間は1つの専門的な仕事ばかりに携わっていると片輪になってしまう．チャップリンの「モダン・タイムス」という映画はこれを戯画している．ベルト・コンベアが流れ，チャップリンはベルト・コンベアの前でつぎつぎと来る半製品のネジをしめる役割を演じるのである．同じことばかりしているので，チャップリンが工場から出てきても手でネジをしめる動作が止まらない．道に出ると向こうを美人が歩いている．その美人の服のうしろにネジとそっくりのボタンが付いている．チャップリンはそれをしめようと思ってネジまわしを持って美人を追っかける．そのため，とうとう痴漢として警察に引っ張られるのである．それは何を諷刺しているのかというと，専門的な仕事ばかりしている人間が片輪になってしまうことを諷刺しているのである．

チャップリンの映画は新しいものであるが，トーマスモアはいまから500年も前にそういうことを考えた．だから，半分の20人が2年間都会にいたら，他の半分の20人と交替に農村に帰るということにしたのである．これは，仲々教えるところの多い着想である．

このほか2人の奴隷がいるが，この奴隷にはどういうものがなるかというと，多国から連れてきた俘虜や犯罪を犯した者などが奴隷にされる．それから彼は，純潔を強調して，姦通したものも奴隷にすると述べている．そしてその奴隷の仕事は，人の厭がる汚ない仕事である．例えば，便所掃除，牛殺し，赤痢患者の世話のような仕事は奴隷がする．この2人の奴隷でまだ手が足らず，厭な仕事の残るときは，悟りを開いた非常に偉い人，つまり聖人にやってもらうのである．京都に西田天香という宗教家がはじめた一灯園という宗教団体があった．この一灯園の人々は．昔朝早く京都の公衆便所を掃除して回ったりしていた．そのように悟りを開いて汚ないことを汚ないとも思わないような人に人の厭がる仕事を引受けて貰おうというわけである．しかし，ともかく奴隷はいるのである．奴隷のいる社会主義とは今から思えば幼稚なものである．

牧師とか騎士とか貴族などはこれまで労働をしていないが社会主義のもとでは誰もが労働する．だから生産力が非常に上る．そうすると人々は一日に6時間だけ働けばやって行けるようになる．こういう非常に大胆なことをトーマス・モアはいっている．ところで生産した品物はすべて共同倉庫に持ち込むのである．麦も織物も全て共同の倉庫に持ち込むのである．そして，各家族はこの共同の倉庫から必要に応じて品物を取って行けばよいのである．能力に応じて働き必要に応じて倉庫から持ち出すのである．そんなことをすれば倉庫は空っぽになってしまうのではないかと思うかもしれないがしかし，トーマス・モアによれば，それは現代の社会に生きる人間の非常にあさましい考え方であってだれもが食うことや着ることの心配のないところでは，必要以上に倉庫から持って行く者はいないはずだというのである．だから倉庫にはいつも，ものがたくさんあるのである．非常に楽観的に考えているわけである．

それから衣服については，色は老苦男女別の四種類だけに限られる．例えば，年寄りはシモフリを着る．幼児は赤い着物を着る．男は青色を着る．女はピンク色を着るというふうに分けるのである．いろいろな種類の服があると，つぎつぎにあれこれと欲しくなってかえって苦労しなければならない．四種類に限るとそんな苦労も虚栄心もなくなる．これがトーマス・モアの「ユートピア」における社会主義である．

(2) カムパネラ

トーマス・モアが出てから100年ほどして，イタリアにカムパネラ（1566—1639）という社会主義者が現われた．当時，イタリアはスペインの支配下にあったが，カムパネラは，そのスペインの統治を覆えそうとして政治運動をやって，27年間牢獄の中に入れられた．そして牢獄の中で非常に興味深い「太陽の国」という本を書いた．これは大体において先ほど述べたプラトンの社会主義のまねをしたものである．太陽の国というのは，一番上にソルという首相がいる．そして，その下にポンという勇気の大臣，シンという智恵の大臣，モルという愛情の大臣の3人の大臣がいる．そしてすべての人が労働の義務をを負い生産にたずさわる．特にカムパネラはプラトンの妻子共有制によって人間の本性を改善しなければならないという考えに非常に共鳴して，どうしたら良い人間

が作られるかということについて，大そう工夫している．それには，やはりリュクルゴスのいったように裸で若い人々を体操させなければならない．すっ裸でいろいろ体操をさせ，大いに体力を向上させる．そしてモルという大臣が裸の若者たちを高い所から見ているのである．モル，つまり愛情大臣，優生政策大臣である．そして星で占ないをする占星術によって男女の契の時間を定める．又，男女の組合せはお互いの欠点を是正するように考える．例えば，やせた男はなるべく肥えた女と組合せ，のっぽの男は背の低過ぎる女と組合わせるのである．そしてお互の悪いところを中和したような良い子が生まれるようにするのである．そのようにして，良い人間が沢山ふえてくると社会主義社会はますます立派になる．

こうして一方において社会の組織を良くしていき，他方において優生政策によって素質の良い人間を作っていくのである．両方の面から理想の社会に近づいていこうというわけである．カムパネラの思想は，大へん空想的であるが，この両方の面から理想の社会を作っていこうという考え方は，ともすれば「社会さえよくすれば人間はおのずから善人になる」という考え方におちいりがちの今日の社会主義者に教えるところが多いようである．

第3章　啓蒙期社会主義思想

1.　三大空想社会主義者

18世紀にはいると，急速に工業化が進み，社会はしだいに現在のような資本主義になってきた．そうすると，資本主義の欠点もいよいよはっきり見えてきたのである．それで，もっと本格的な社会主義が現れて来た．これが啓蒙期社会主義である．いまからみると依然として空想的だが，当時としてはより進んだ社会主義が出て来たわけである．その代表者がサン・シモン，シャルル・フーリエ，ロバート・オウエンである．通常，この3人を三大空想社会主義者と呼んでいる．

(1)　サン・シモン（1760—1825）

このうち，サン・シモンはフランスの伯爵の家に生まれた．生来，非常な豪傑で，子供の頃に道で遊んでいて狂犬病の犬にかまれたとき，うちへ帰ってかまれた個所を焼け火箸でジリジリ焼いて毒を消したということである．また，馬車が頻繁に通って遊びを邪魔して困るので，道のまん中に大の字に寝て馬車が通れないようにしてしまったというような話も伝えられている．更には，召使いが朝「坊ちゃん起きなさい」といって起こしに来るのがどうも気に入らず，「伯爵お目ざめ遊ばせ，伯爵にはなさらなればならない重要な仕事が御座居ます」といって起こすように命じたという話も残っている．

彼は貴族の家に生まれたが，18世紀末のフランス革命で財産を全部失なってしまった．普通の貴族であったら斜陽族というわけで，いたずらに昔を追懐しつつ細々と寂しく暮らすのだが，サン・シモンはたちまち投機に手を出して，大もうけをした．革命で失った財力をすぐにとりかえしてしまったのである．そして，普通の人間ならば今度得た財産を後生大事に守って一生涯暮らすであろうが，サン・シモンはそんなけちくさい男でなくて，その投機でもうけた金で毎日毎日一流の学者を呼んで来て大宴会をやったのである．ドルバック，エルベチウス，ラグランジュといったような学者を呼んで来て，連夜宴会を開き議論を行った．

さて，サン・シモンは産業主義の社会というのを提唱した．その当時の社会で貴族や僧侶や軍人や役人が威張っていたが，しかし，サン・シモンによればこんな非生産階級ではなく，本当にものを生産する産業者が第一階級にならなければならない，というのである．いまの世の中で貴族や僧侶や軍人がみな一挙に死んだら，その家族が泣くだろうが，人類が亡びたりはしない．しかし，生産者が一度に絶えたならば，貴族や僧侶も食べるものがなくなって死んでしまう，つまり，すべての人間が死んでしまうのである．決定的に重要なものは生産者である．だから生産者が第一階級になるような社会にならなければならないとサン・シモンはいっている．その程度のことを主張しただけなので，彼を十分な社会主義者とは言えないが，その弟子のバザールやアンファンタンたちがサン・シモン派を作り，もっとはっきりした社会主義を主張するようになった．そうした弟子を養った意味で，彼も社会主義の大先覚者とみなすことができる．

(2)　シャルル・フーリエ（1772—1837）

つぎに，シャルル・フーリエは，フランスの毛織物商人の息子に生まれた．そして．ある日店番をやっているときにお客が品物を買ってそれを持って帰ろうとしたのだが，ふと見ると，それにはキズがあった．フーリエは，持って帰るお客を呼び止めて，「それはキズがありますよ」と忠告をしたのである．それを，フーリエの父親が見てひどく叱った．「お前は商人の息子に生まれていながら，キズがあることをお客さんにいうとは何ごとだ．キズがあるのをうまくいいくるめて売るのが商人ではないか」といわれたのである．そこで，フーリエは一体嘘をつくことが一生の仕事であるということほど情ないことはない，嘘をつかなければ生きて行けないような社会には欠陥がある，と考えた．

その後，彼はマルセイユの穀物商人のところに徒弟奉公にやられた．ところがそこでみていると，マルセイユの穀物商人は穀物の値段をつり上げようとして，蔵の中に穀物を長い間しまっておき，なかなか売りに出さない

のである．外では飢えて死にかけたりしている人が沢山いるのに蔵の中では穀物がいっぱいあって値上がりを待っている．そうするうちに蔵の中の穀物が下積の方から腐って来た．そこでこの腐った穀物を船に積んでマルセイユ沖に捨てに行った．一方では飢えて死にかけている人間があるのに，他方では価格を引きあげるためにその穀物を長いこと保存しておき，腐らして海に捨てるというわけである．これは非常な矛盾だということを考えて，フーリエはますます社会主義的になっていったのである．

そして，フーリエは社会主義社会を作るために，ファーランジエという理想の社会を考えた．そのファーランジエを地球上全部に実現させて全世界を社会主義化しようと構想したのである．フーリエはファーランジエのための資金を集めようとした．そして「私に100万フランあれば，ファーランジエを作ってみせる．100万フラン寄付してくれる人があったら，ちょうど昼の12時に私はいつでも家で待っておるから家にやって来てくれ」という広告を出した．そして，人と話をしていても，外でお茶を飲んでいても，昼の12時になると家にとんで帰った．一生涯待ったが，とうとう死ぬまでだれも寄付してはくれなかった．忠犬ハチ公のような純真な人であったらしい．

ファランジエというのは1つの共産部落である．その中では財産はみんな共有であり，食事は共同で食べる．この共産部落には人間は800人ないしはその倍数ずつ集まる．なぜ800人集めるかというと，800人の人間が揃えばあらゆる趣味の人があつまることになる．魚釣りの好きな人，畠仕事の好きな人……だから800人集って，一社会を形成するとすれば自給自足の生活がうまくできるというわけである．そこで仕事はそれぞれの組をつくってする．魚釣り組，田を耕す組といった組である．誰もが自分の好きな組に入る，魚釣りの好きな人は魚釣りのグループ，畑作りの好きな人は畑作りのグループに入る．だから仕事即娯楽ということになり，人間は仕事の苦痛を感ずることがないのである．だから能率は非常に上がる．そして，生産はうんと殖えるから，食事は一日に7回も取る．従って，栄養もよくなり，人間の寿命は延び，平均寿命が144歳になる．また，身長も伸びて平均身長は7尺になるであろうというのである．

フーリエ自身は先に述べたように，100万フランを寄付してくれる人を待っていたのだが，結局そういう人が現れず，理想を実現することができなかった．ところがフーリエの弟子にコンシデランという人がいて，この人が中心になって本格的にファーランジエをつくりかけた．コンシデランたちは現代風にいうと，共産部落設立株式会社というものをこしらえて，あちらこちらから資金を募集した．その資金によって，アメリカやメキシコに非常に広い土地を買った．そうして社会主義国を作りたい者は集まれといって，そういう人を集めていっしょに船に乗ったりしてそこまで行き，ファーランジエを作ったのである．今から思えばまことにロマンチックな時代であったわけである．ファーランジエ設立会社だけでも2,30社もできた．そして200近いファーランジエがあちこちに実現されはじめたのである．

しかしながら，結局これは失敗に終わっしまったのである．一番長いのには第一次大戦まで続いたのがあるが，それは例外でほとんど4，5年以内で解散している．どうして解散したかというと，理想の社会を作るといって集まる人間には，非常に理想家肌の人間が多いわけであが，そういう理想家肌の人間は，ともすれば力もなく不器用である．その上，文句が多い．共産社会にさえなれば人々はよろこんで仕事をするであろう，いまは資本家にしぼりとられているのだから，仕事をしたがらないが，共産主義になったら人々は自らのためになり，お互いの社会のためになるのだから，労を惜しまず一生懸命働くであろう．こう考えてきたわけだが，共産部落で仕事をしてみても，やはり仕事のつらさは同じである．苦しいことは苦しいのである．そこで，集ままった人々は他の人よりなるべく働かないようにしようとし，労を惜しむわけである．

共産主義になったらみんなお互いにすべてをいっしょにするのであるから自分の私利私欲をむさぼらないようになるであろう．公共のためにほんとうにつくすであろうと思っていたわけであるが，結局人々は，少しでも人より大きな魚を食べたい，たくさんパンを食べたい，あるいは少しでもいい衣類を着たいと考えた．そういう欲望は共産部落の中でも防ぐことはできないのである．結局は共産部落になれば人間は善人になってしまう，と考えていたわけであるが，いざひと所に集まってみると結局人間というものは人間であって，労は惜しむし，苦は避けたがる．それから，また欲の皮のつっぱっているという点も何らかわりはなかったわけである．

そこでお互いに人間同志の間に衝突が起きるし，生産はあまりあがらない．しかも共産部落の外の資本主義の部分では急速に技術革命が進んで，産業が発達していく．共産部落が最も進むと思っていたのに，当がはずれたのである．共産部落憲法をみなつくっているわけだが，その憲法も何度も何度も改正し，たいてい4～5年で残念ながら共産部落も亡んしまったわけである．だからうまく行かなかったのである．結局，人間は空想社会主義者たちが考えたほどには善人ではなく，労も惜しむし私欲も深い生きものなのである．善人を前提しての社会主義

は現実の壁にぶちあたって潰れたのである．

このような経験をへて，西欧では理想的な共産主義社会，あるいはマルクスがいっていた通りの共産主義社会がくるというようなことは，現在ではあまり考えなくなってしまっているのである．もっと現実的な社会改良主義的な道を労働階級が歩むようになってきている．どうしてそういう道をとるようになったかというと，共産社会になったらすべてが夢のようにたのしいだろうなどという考え方は，もう100年も前に実験ずみなのである．不可能であるということは実験によってはっきり分かってしまっているわけである．だから西欧の先進諸国の勤労者はそういう共産主義の空想などということは考えなくなってきているわけだ．こういう経験を過去にたくさん持っているということは，西欧の勤労者政党の社会思想を考える上に極めて重要である．

(3) ロバート・オウエン（1771—1858）

サン・シモンとシャルル・フーリエはフランス人だが，英国にはロバート・オウエンという社会主義者が現れた．これは英国の馬具商の息子であった．当時英国では産業革命が進んでいた．彼は友人と組んで，繊維産業関係の機械を製造する工場を作った．それがうまく行って，だんだん大きな工場になった．そういうロバート・オウエンの腕を見込んでもっと大きな工場を持つ人が，彼に娘をとつがせ，自分の工場の支配をまかせた．だからオウエンは，非常に大きな工場主になったのである．

オウエンはこの工場を社会主義的に建設運営して行こうと努力した．たとえば，オウエンは，ほかの工場では非常な低賃金を払っているときに，自分の工場では思い切って賃金を引き上げた．周囲の人が君の所だけ賃金を引き上げたら会社がつぶれてしまうぞ，という忠告をしたが，オウエンがその忠告に耳をかさず，思い切って賃金を引き上げたら労働者の生産意欲が上って，会社はつぶれるどころかかえって栄えたのである．また，彼は初めて工場付属の幼稚園をつくった．さらに，いまはどこの会社にもあるが，彼は工場に消費組合の売店を作り，従業員が安く品物が買えるようにした．これもオウエンが初めてやったことなのである．その他いろいろな試みをやって，自分の工場を当時として随分社会主義的に運営して行ったのである．

しかし，ロバート・オウエンは，自分の工場だけをよくしても社会全体によくならないから，もっと広く社会全体を社会主義化しなければならないと考えた．そしてフーリエと同じように，理想の共産主義部落を作ったのである．ニュー・ハーモニーという部落がそれである．ところが，これも失敗し，結局やめざるを得なくなってしまった．

2. 2つの実験とその失敗

このサン・シモン，シャルル・フーリエ，ロバート・オウエンを前に述べたように，三大空想主義者という．しかし空想的といっても，イギリスのトーマス・モア，イタリアのカムパネラなどにくらべるとずっと理実的であって，結局この3人が今日の社会主義の基礎を築いたのである．この社会主義者たちは，社会主義を述べただけではなく，先ほどから述べているように理想部落の建設などに着手した．だから，彼らの社会主義を実験的主義社会ともいう．このようにニュー・ハーモニー村やファランジエのような社会主義部落の建設は失敗に終わった．

そこで．ロバート・オウエンは，新たに国民衡平労働交換所というものを考えた．それによって社会主義を実現して行こうとしたのである．国民衡平労働交換の交換というのはどういうのかというと，今日商品の取り引きは金・銀の貨幣によって行われているために商人が中間利潤を搾取してそれを貯めて富んで行く．中間利潤をとられるから労働者はいつまでも貧乏でいなければならない．金・銀が貨幣であることはいけないのだから，新しい貨幣制度を作る必要があると考えてオウエンは新しい貨幣制度，すなわち国民衡平労働交換所を考案した．

新しい貨幣制度というのは，労働時間を示す切符，つまり労働切符（レーバー・ノート）を貨幣とするのである．そして例えば大根2本をつくってこの国民衡平労働交換所に持って行くと，2本の大根をつくるのに平均して20分の時間を要するのであれば20分と書いた切符をくれるわけである．また靴をつくるのに5時間かかるとすれば靴を一足持ち込むと5時間という労働切符が貰える．大根を作る人は20分という切符を集めて5時間分にし，それで靴を買うことができる．また，大根を買いたいと思えば，20分だけの労働切符を持って行けばよいのである．こういう具合になっている．労働しないものは労働切符という貨幣がないから，ものを買うことができないわけである．労働をするものだけが切符を手に入れるのだから，遊んでいてぜい沢をするという階級はなくなってしまう．そして彼は考えただけではなく，1832年にロンドンに国民衡平労働交換所というものを現実に設立したのである．

これは，最初の半年ぐらいは非常にうまく行った．そして，一時は貴族やブルジョアの間に非常な恐慌さえ巻き起こしたのである．貴族やブルジョアたちは，国民衡平労働交換所が一般的になればわれわれはしまいにものを手に入れることができなくなってしまう，と心配しはじめた．これは大変だというわけで，これまで労働をし

たことのない貴族の婦人が急に編み物の稽古をしたり，ブルジョアの紳士が急に畑を耕やし始めたのである．そういう現象まで引き起こしたほどに，この国民平衡労働交換所は当然の社会に大きなショックを写えた．

しかし，これも半年ほどするとやはり行き詰まってしまった．なぜ行き詰まったか，というと．このように労働時間によって品物の価格を表わすのは一応面白い考えではあるが，残念ながら人間の需要というものは，労働時間にピッタリ比例するものではなく，いかに長い時間をかけてつくったものであっても，それが人の需要にマッチしなければだれも買いに来はしない．いつまでも残る．いかに長い時間をかけてつくったニンジンであっても，まずかったらいつまでも交換所に残るであろう．いかに短い時間でつくった服であっても，それがニューモードで人々の好みに合っていれば飛ぶように売れてしまう．2時間でつくったものでも5時間という値だんで売れる．労働時間通りで売買していると蔵の中にはだれも欲しがらぬような品物でいっぱいになって，人の欲しがるものは1つもなくなってしまった．そういう現象が現れたのが，国民衡平労働交換所の崩壊の最も大きな原因である．それと共に，国民衡平交換所における労働時間の評価人の評価がなかなか客観的にはできない．持ってきた人が30分かかったというのを，評価人は15分と決めようとする．そこでもめるわけだ．そういう争いがしきりに起こるようになり，何度も評価人の首をすげかえたが，何度すげかえてもやはり市場で決まる値段ほど自然なものはないので，つぎつぎと文句が起きてくる．そしてこれが国民衡労働交換所をつぶすもう一つの大きな要因となったのである．こうして社会主義部落の建設と同じく，国民衡平労働交換所も失敗した，そしてこれは，後ほど現れたマルクスの労働価値説に対する重要な批判になるべき性質を持っている．

3. 後世への影響

この三大空想社会主義者の中で，オウエンは特に幅の広い活動をした．彼は，共産部落や労働交換所の失敗の後に結局，労働組合をつくって労働者の勢力を高め，それによって労働者の生活状態の向上をはかるべきだ，と考えた．労働組合はもっと古くからあったのだが，このロバート・オウエンの力によって，全国的規模の労働組合がはじめてできたのである．1834年に，全国労働組合大連合（GNCTU）という英国全体にわたるような労働組合の大連合体がつくられた．AFL・CIO, TUC, DGB同盟，総評といったような全国的な組織の組合は今ではどこの国にもあるが，そうした組合の先鞭をつけた非常に重要な人物がロバート・オウエンである．この労働組合の発展によって，それ以後の労働者の生活がだんだんと改善されることになって来たのである．

それからもう一つ，労働組合ではなく，先に述べたように消費組合というのもオウエンが考えた．初めは工場内にだけ作ったのだが，やがてロッチディールというところで，地域単位のものができた．これは今日大変普及していて，農村に行くと農業協同組合という形で色色の仕事をしており，都会では生活共同組合という形で活動している．関西では灘の生活共同組合が早くからできて非常に有名である．しかし，オウエンのころはどこにもなかったのである．彼は共同で品物を入れて中間搾取を排し，労働者が安く品物を入手しうるようにと消費組合というものをはじめて考えたのである．この労働組合運動と消費者組合運動は，今日に至るまで発展しつづけ，労働者の生活状態の改善に大きな貢献をしている．

第4章　過激急進主義と無政府主義

1. 過激急進主義

こういうようなのんびりしたロマンチックな空想社会主義が現れた一方において，フランスに非常に過激な急進主義的社会主義が現れて来た．それは，F・N・ハブーフ（1760—1799）という人，および少し遅れて，A・ブランキ（1805—1881）という人などである．彼らは，まず一刻も早くて現在の国家をつぶさないとだめだ，つぶしさえすればすばらしい社会が待っているのだ，といったような考え方をしていた．これを黙示録的緊迫感という．聖書の黙示録の中で，いまに悪い世の中がつぶれてしまってすばらしい天国が来るであろう，その時は目前に迫っている，といっている．信ずるものはその時に救われると説いている．黙示録がいっているのと同じような緊迫感を以て過激急進主義者たちは，いまに悪い社会がなくなってすばらしい社会がやってくる．そのためには直接行動に訴えるべきだ，と主張しているのである．こういう考え方はマルクス主義を通じて，現在の全学の考え方の中にも非常に強く流れている．

それからもう一つは，大体，議会主義を通じて社会をよくしようとしたってダメだ．労働階級の代表者であっても，一たび政治家として中央に出て行くとすっかりブルジョア化し，貴族化して，労働者のことを考えなくなってしまう．だから選挙を通じて政治家を選び，その政治家たちの議会活動を通じて社会を改善しようということを考えるのは間違いである．労働者が直接行動しなければならない．しかも，それは武器を持って現在の政府首脳者を片っ端からたたき斬り，裁判所や刑務所や役所を打こわすという荒療治によらなければならない．その荒療治をすれば，ガンの摘出後に新しい肉芽が盛り上って来るように，新しいよい社会が現れるというものだ．こ

の考え方もマルクス主義，共産主義の中に流れている．

第三には，革命のほんとうの意義を労働者全体が知るというのは無理である．革命のほんとうの意義や時期を知っているのは少数精鋭の選ばれた人々である．この少数精鋭が革命をひきいていかなければならない．したがって革命が終わるまでは少数精鋭が独裁を続けていかなければならない．というのである．このプロレタリヤ独裁という考え方もマルクス・レーニン主義の中に非常に強力な影響を及ぼしているのである．この人たちは，たびたび過激な行動をおこし，一生涯の大部分を牢獄の中で過ごしてしまった．

この黙示録的緊迫感，直接的暴力行動，少数精鋭の独裁という考え方は無政府主義者やマルクス主義者に受継がれ，後々までも影響を及ぼしている．例えば，ロシアのバクーニンという無政府主義者もずっとこのような考え方を持っていた．また，マルクス主義からレーニンに至るまでこの直接行動主義は大きな影響を与えているわけである．例の安保騒動のとき，全学連が国会の門をたたきこわそうとし，またハガチーの自動車に実力を加えたりしたが，あれらは正に，マルクス，レーニンを通して今日にまで生き伸びているバブーフ主義，ブランキ主義の現れである．マルクス，レーニンの暴力革命主義，独裁主義の源は，バブーフ主義，ブランキ主義にあったのだ．だからこれらを無視してマルクス主義あるいは現在の社会思想を考えるわけにはいかないのである．

2. 無政府主義

無政府主義とはどんなものかというと，国家とか法律とか，そういうものは一切要らない，国家のない社会主義をつくろうではないか，という考えである．共産主義の国家であっても，国家である限り権力の集中が生じる．権力が集中すれば，その権力を濫用する人が出てくるに違いない．だから一切の国家は悪の根源である．国家が行う政治や法律というものは一切なくしよう．そのようなものがなくても人間は本来理性をもっているから，お互いに約束を結んでいけば社会生活を行うことはできる筈である．国家などは徹廃しよう．このような考え方の社会主義が現れてきたのである．これは特に国家権力の強かったロシアやドイツ，フランスなどに栄えた．

無政府主義は通常2つに区分されており，1つは個人主義的無政府主義で，もう1つは集産主義的無政府主義である．

(1) 個人主義的無政府主義

同じように国家も政府もいらないという無政府主義であっても，空想的で非常に徹底したものが，個人主義的無政府主義である．ウイリアム・ゴッドウイン（1756—1836）やマックス・シュチルナー（1806—1856）などが徹底した個人主義的無政府主義の代表者である．たとえば，ゴッドウインは自分が結婚しても，結婚届を出すと国家を認めることになるからというので，届を出さなかった．また，結婚しても夫や妻が互に相手を拘束するのでは自由が実現できないといって，夫婦別居していたほど徹底していた．

しかし，悪い者や犯罪者が出たらどうするかというとこの点は非常に楽観的に考えている．つまり，みながいって聞かせたら，人間は本来理性をもっているのだから当然直る筈だ．と説明している．いわば人間の性善説に基いているわけである．

それから，シュチルナーは少し気違いじみた個人主義的無政府主義者であった．国家も法律も，良心さえもいらない，良心でも心の中にあって，人の感情や精神を監視し自由を妨げるものである．一番世の中で大事なものは，神でも王でもなく，自分自身のエゴ，すなわち自我である．これを一番大事にしよう．エゴとエゴでお互いに契約を結んで社会生活を律していこうというのである．このように余りにも空想的であった．

(2) 集産主義的無政府主義

そこでもう少し現実的であり，したがって国家とは言わないが，国家的なものを認める無政府主義的社会主義が現れる．すなわちフランスのプルードン(1809—1865)ロシアのバクーニン（1814—1875），クロポトキン(1842—1921）などである．彼らは国家は認めないが，個人個人の契約に基く一つの自由な組合，または連合体を形成して，それによって共同生活を規律していったらいいではないかと考えるのである．この連合体は個人が契約で作る連合体であるから，個人はこの連合体からいつでも抜け出すことができ，入りたければいつでも入ることができる．国家の場合はこれを抜け出すことはできない．そのような国家では個人の自由を拘束することになるから，いつでも脱出できる連合体をつくろう．そして連合体のさらに連合体をつくって，それによって共同生活を規律していこうというのである．これがすなわち集産主義的無政府主義である．日本では無政府主義が現在まったく衰えてしまっているが，ロシア革命頃まではかなりの勢力を持っていたのである．皆さんの中で大杉栄という名前を知っている方があろうかと思うが，関東大震災のとき，彼が甘粕大尉に殺害される頃まで日本でも無政府主義は相当な勢力をもっていたのである．

世界においても，1864年にマルクスやバクーマンの参加のもとに第1インターナショナルという国際的労働組合連合体ができているが，この頃はバクーマンとマルクスとがたがいに張り合って，勢力半ばしていたのである．ロシア革命についても半分，あるいは少なくとも4割ぐ

らいまでは無政府主義者がその実現に貢献していたといわれている．しかし，だんだんとロシア革命が進行していくにつれて無政府主義者は葬られ，マルクス主義者1本になってしまった．そして今日では，ロシア革命はマルクス主義者だけが起こしたというふうにいわれているわけである．実際，今日大した影響力は持たないようになってきているが，ロシア革命までに大きな影響力を持っていたということは，記憶しておかなければならないのである．

またマルクス主義の立場では，国家は資本主義社会における人民を搾取するための機関である，革命の過程においては，プロレタリアートが国家権力を掌握するプロレタリア独裁が行なわれているが，革命が完成した暁には，国家は消滅するものだ，と見ている．このような革命完成以後におのずから国家というものはなくなるというマルクスの考え方は，無政府主義者たちの影響のもとに生まれてきたものである．その意味において無政府主義者のマルクス主義への影響というものを決して無視することはできない．（以下次号）

13頁より続く

ていないが，レーザーの非線形相互作用を利用した最近の研究は物質の性質やその配合が非破壊的な見地で決定可能であることを示している．

IX 結 論

これまでレーザーが如何に広く工業に応用されてきているかについて述べてきたが，レーザーが今や科学の分野で重要な地位を占め，実際には標準的な研究機器となったことは明らかである．我々はレーザーの経済的利点はレーザーの性質，特にレーザー輻射と物質との相互作用が広く理解されるにつれてもっと明らかになるであろう．発明は必要の母という感が深いのである．本文は次の文献を参照してとりまとめた．

参 考 文 献

1) F. P. Gagliano et al; Proceed. IEEE 57, 114～145 (1969)
2) 山中他：電気学会誌，88，774～784，950～957（昭43）

30頁より続く

8) N. B. Hanny: Semiconductors, Reinhold Pub. Co. (1959)
9) H. P. Kallman et al: Photo. Sci. & Eng., Vol. 4, 345 (1960)
10) L. E. Walkup: U. S. Patent 2, 825, 814 (1954)
11) R. H. Moore: U. S. Patent 3, 124, 456 (1964)
田中他：特許公報 昭42—23910
渡辺他： 〃 昭43—2627
丸島： 〃 昭32—44748
21) 日本物理学会編：物理学論文選集143 II—IV族半導体 (1964)
M. Aven et al: Physics and Chemistry of II-VI compounds, North-Holl and Pub. Co. (1967)
D. G. Thomas: II-VI Semiconducting Compounds, W. A. Benjamin, Inc. (1967)
13) M. Smith et al: J. Appl. Phys., Vol. 36, 3475 (1965)